

「ただいま」

「ゆたか、ちよつときなさい」

お帰りの返事もなく、呼びつけたお父さんの声は、いつもより強かつた。

「お前か、猫をひろつてきたのは」

居間にはいるなり、耳につきつけられた言葉に足がすくんだ。

「カラスが狙っていたから……。食べられちゃうから……」

「今から、もどしてきなさい。元のところへ……」

「……」

いやだと思った。それでも口にはだせなかった。

「お父さんは、猫の毛アレルギーなの。子供のころ、ぜんそくをわずらったことがあるの、それ、猫の毛が原因かもしれないんだって」

「友だちで、飼ってくれる人さがすから……」

「いなかっただらどうするの」

そう言った、お母さんの脇で、お父さんがこつちを見ていた。にらまれているようで、目をあげられなかった。

「それまで、納屋で飼うから、自分で生きていかれるようになったら、のら猫にするから」

「聞き分けのないやつだなあ、のら猫を増やしてどうするんだ。のら猫のせいで迷惑こうむっている人間のことは、どうなるんだ」

「……」

「とにかく、うちじや飼えないから、元のところにもどしてきなさい。お前が悪いんじゃない、最初にすてた人間が悪いんだ。うちで育てて、のら猫を増やしたら、うちが悪者にされる。分かるな……」

「……」

もう口ごたえはできなかった。

「今からいつてきなさい」

「だれか、猫の好きな人がひろってくれるかもしれないでしょ」

「そう付け加えたお母さんの言葉は、声だけやさしかった。ゆたかは、言葉をうしなつたままに立ち上がった。」

「待ちなさい。これミルクとお皿。ひろつてくれる人があらわれるまでに、死んじゃうと困るから……」

お母さんが差したした、牛乳パックとプラスチックの皿を受け取り、ゆたかは納屋に歩いた。歩きながら、こうなることは、初めから分かつていたような気がした。

納屋に入ると、その気配を感じたのか、子猫たちが鳴きだした。

納屋の電灯をつけると、けんめいに伸び上がって、愛を求める子猫たちの姿があつた。たつた二つの、こんな小さな命でさえ、まもつてやることのできない自分のことが、みじめでならなかった。大きくなつて、自分で働きだしたら、ぜつたい、お父さんの言うことも、お母さんの言うことも聞かない。そう思いながら、子猫の入った箱にふたをした。子猫たちが、キーキー鳴きながら、助けてよと、うつたえかけるように箱の中を動きまわつた。

公園から見える入り江に街灯の光がゆれている。古本屋のおじさんの家に、明かりの気配はなく、廃屋が、自分のしでかした罪のきずあとのようにたたずんでいた。

ゆたかは、指にミルクをつけて子猫たちの口にもつていき、立ち去れない思いのままに時間を過ごしていた。子猫は、ミルクのついた指にしゃぶりついて、けんめいに吸い込もうとする。そのざらついた舌の感触が、指先に心地よい。

(中略)

生きようとしている子猫たちを見つめているうちに、ゆたかは、どうしても助けてやりたくなつた。ここに放つておけば、明日の朝にはカラスがくるだろうと思つた。頭の中では、子猫たちをかくしておける安全な場所をさがしまわつていた。自分の家で、見つからない場所は、もうなかった。あそこ、このことを思いをどんなにめぐらせても、人の目のないところは思い当たらなかった。

(笹山久三「ゆたかは鳥になりたかつた」)

問題 A お父さんは、
お母さん
猫の子
めがた
お皿
たて
X

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

お父さん
お母さん
猫の子
めがた
お皿
たて
X
問題 B
お父さん
お母さん
猫の子
めがた
お皿
たて
X